

嘉永の亥幼春

特 別
^5
6590
64



ハ5
659D
64

腰月十二日万自念の二回り麻二の意
寺のあり居たりお智を給也
社中 経一



島村のよ主やふ代めり縁

東海

祝いごとくれお祝をむ具麻二

牛一取も者も七果を口並りて 松二

右奇抄のり

ちまのり

韻を流るる少くは

二受

老と若りよ雨後の

松二

枝さらり果るるま

松七

追門くさるる

竹七

吹かひあはるる

松七

まを駆せんと

井六

入上れいま

竹七

りあはれ

二

おを来てあや

ゆ

市の傍ふおむ

六

さくもせふに及ぶの神 如化
あまのこゝろのまゝにびくはく
まの縁のまゝにねをいふりて
久し振るも毎年のまゝに
あつた〜街の〜大井川
う〜路地ふららぼる餅
被〜しち〜ぬ〜むのを
笑 化 多 太 多 貴 化

二
さくもせふに及ぶの神 如化
あまのこゝろのまゝにびくはく
まの縁のまゝにねをいふりて
久し振るも毎年のまゝに
あつた〜街の〜大井川
う〜路地ふららぼる餅
被〜しち〜ぬ〜むのを
笑 化 多 太 多 貴 化

科 小豆 ^{三千} 法名 味 _六

幼 け _六

は _六

公 _六

料 _六

洗 _六

深 _六

と _六

や _六

了 _六

卷 _六

ま _六

其 _六

名 _六

ちりし柳おまのちん浦波 二
 ちねあつて野の元の走とれ 葵
 雨のきげよ吹く煙 六
 角のぬい只行ありお結音は 六
 主と行やう高ーゆき 葵
 枝打くおねてせまのき曲りた 多
 雲のるりり旭き月じ 七

春を吹かろふえんろむおのち 二
 中ノや煙くあふ煙多 子

右奇仙り

石を吹かろふえんろむおのち 二
 歩り外ま月細りぬ松の内 一
 未年候よりふあ修をあすおあは

蛇の物尾しくほそりも 山木

その花をかつらぬまは旅用を 松葉

花をささげしとんぬ風を 夏

花とをまははらり来り月 初め

うちうけい細代もも木の根 葉花

花いしりりうまおこの道 有花

月川に影をばはるる娘の子 竹化

も蟻帽のゆりまきしとき 葉花

舟の底のほけは石をてるあふん 花

未も細いぬあらの花をりし 葉

りたあむ目懸体ありかたのそ 仙

つらみか花をまら血の焼茶 二

中えすやうと道む 柱しけ ぬ

新や為の下に 但織 七
冠を下げ 罷りけり 瓶内 友
福よいささし 白髪そけり
枝ありと 作りて みる 此の花 七
社ありの ありて 市に 此の 多
ありて 追門の 御子 七 傳 一 舟
欠し ありて 煙を みる 此 菜

伝をかり 傳授の 舟の 御子 七 傳 一 舟
そめぬ ありて 晴き 此 舟
よれ 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟
舟の 舟の ありて 舟の 舟

失念すせし軍おとらり 笑
 金もたておまぬ愛いあも袋 化
 女高小祥てやまを改後 二
 立侍はるる 自のて異り 左
 中一り一帯 ぼりゆ 始
 柳女あふり 暮られ後て慶 六
 侍 神のれのみま感あり 仙

石垣もおまて 伽藍の形書法 二
 名際を 神の徳もつて 二
 大まに言傾けし 仲人へ 笑
 日くけしや川と 午時不道て 仙
 の坊み学て ちありむの枝 化
 網も様とてあは 浦上産 子
 右世言り

尾むしーコことかの殿の帝 二
そよよあけらるる風のよの清し 二
髪を油練かろんえんり 二
あつあつしぬ痛うちをれ 二
長らるるあまの末ね本 二
まろくしゆらぬぬの流るるし 二
あつあつしぬ流るる月影 二

茶う流るる御殿の流るるあかり 二
兵しーまに雲もあまの物 二
万燈の定るる流るる御殿の代 二
伊まろくしゆらぬぬの流るる 二
伴ふとあまの流るるあまの 二
松篁しーまに雲もあまの物 二
あまの流るるあまの流るる 二

延くし河はあつ 橋をの受
とくにまじり 雲はよき道は
おろしき子 交の雲
子

右云仙り

常を採乳

着代やあれし 雲はあつま
まき雲は 雲はあつま
おろしき子 交の雲
子

山吹花 枝のまろ 里実

梨子 花あやまら 雲はあつま
雲はあつま

あつまのまじり 雲はあつま
雲はあつま

あつまのまじり 雲はあつま
雲はあつま

○

同し 雲はあつま 雲はあつま
雲はあつま 雲はあつま

はしりまのりか松竹多興行

まじり

まじりきし山粧りやまはれ糸

机まをいそむおはりてし

机多

椀餅の口や浴衣の合ぬらん

糸六

ぬい鳥何ぞよ 柳

松二

能事一は月浮ひり月の光

柳化

杖一白うねり松茸

松菜

萩入しそ風儀ま糸の耳み立 汐古

風一ゆりくぬく送戸

六

はちの籠一府一海の小島

古

トあわて野さの足とし

夏

又燕の腰一ちと安ひ 産

六

鼻月の味一をりおる石

石

銀盤を初うの上一思う 松

二

玄海殿をまると此

替り初め止上れに嫁り君

手固くもを婢まふ此

梯目を清くても清き志のま

清くも本も清みの以

前ものに信入るまに際

みよよせんと又使ま

古寺に舟付の持持りま

鶴うねい馬し 鳴く

云けをよみぬし子のあま

ひしものよを清何の様持

千おを所てを敷うり

石の浦は持り日の出

庭にて君やえり法ても

安土の友婿一く目の足寄り 有石

弓矢の取く方より丁の事 六

と知れくみ解く 稲穂お娘さる所 七

と知れくみ解く 稲穂お娘さる所 七

純なるうでてもはかしく 六

玄軍をこと川ハ暗き 玄龍江 八

手あゆ津共さる 陶 二

いらもやさむおもとくろお方はとむ 化

年一は篇うはらぬの佃 子

右舟仙舟

ゆくもを多し止くまは糸 葉

夕葉のをし柳りやあのも 有

活きややまの峰のさ結 由

白きあゆみはてんぬかそらゆり 葉

さちのまゝに訪ふやゆくりたなみの茶 化
平福にて山西者一白とんり 古
あむじあや活けておまけの松ん餅 六
あまや茶葉うたの此の糸 赤石
山の裡一さた早も糸一茶のむし 二
衣久いひふんよ山藤と一跨ま 八

ふゆり田の極くや時を
おとあゆしてうりて然りけり

ふゆり月分もまら合書り

多主

二のふりハ松ん餅もゆす也けときた 古石

女と侍くらあまの叔 松石
あふりくさあ拂子風とく 松葉

枝をさあささる木のまじし

昇六

溪師所往く後ゆれ旅やま

下田

人へ訓へたの士 横

東海

とあさしむいさぬ月の旅あろも

松二

杵へ視へ紅葉しホクウ

葉石

小洪へほろのまろく行ま

毛髪

悟て追ぬまのハ 信て物

竹化

中縁へてんたぬまの ちあらの内

巻三

室戸の浪の空なう流るる

二

一 行のあさしり 除る村へれ

六

せぬを物へてしを中まふ

笑

殿下へもねさるせよと此作る

海

如へさる旅のひ終るるり

七

藤井
姉の如
く
西地

入道
石舟
角
舟

中月夜の二の

母と風友の舟をこぼして

風洲

舟をこぼして山の家を水

舟をこぼして山の家を水

嘘

母をこ

舟をこぼして山の家を水

松葉

吹く風ののり白浪とや

松二

舟をこぼして山の家を水

舟六

舟をこぼして山の家を水

舟七

舟をこぼして山の家を水

舟八

舟をこぼして山の家を水

舟九

舟をこぼして山の家を水

舟十

舟をこぼして山の家を水

舟十一

舟をこぼして山の家を水

舟十二

舟をこぼして山の家を水

舟十三

雪の上をちりのほろり〜〜〜ヤ
 一費
 餅〜魚〜〜〜
 五費
 何れや〜に君を〜め方の〜の〜
 右石
 又と頂〜〜
 一角
 笑〜
 車餅
 首と〜
 二費
 赤〜
 二費

江戸千々女定船念由
 女定船念由
 歌

二

い〜ぬ名保〜
 五左
 多〜と姉〜
 五左
 膏雨アキラ邦家〜
 左経
 升〜
 休意
 旗子の白〜
 五省

そとに回つて雲をうらはせ

日よみ送るん流の流の心のみま

石のめりむらもさかぬ

右より款

手を入るもかやあがりしちのこ

入直にまをさすしや梅の雨

風海

梅仙

直にまのうはりの者はつた

怒るるの依人の星や曙の光

楓行をととのまやちの山居り

栞えや月の出付と云はれは

吹とらる波のめをりよむ

心ちるおの怒やちの山

かまもまは浮世をぬ山栞

櫻の

ては

浪左

松葉

早去

自着

甚矣

ふくしんく 隆く 伝中 流

能くそあきららり 十二のり

後の野の青く 運る

夕見のそを 携て けん

豊年とをち 楽ふやう

ふまふい 思ひ ぬの ぬん

ふら 後ふ 其ふ 其ふ 田楽

松こ
那ゆ
素為
州代

華ふよの 華ふら 一と しの元

新くと ねふ 小ら ぶふ なる

まふら 一と ねふら ね 何と かな

ふら 女の 介 持れ くる 持

物 一と 出 一と 一と 方里

あふ 一と 中 一と 一と 塊

何れ 地 一と 我 一と 何と 一と 終る 一と 一と

月六
里伯
美石
仙

別ぬ月刺みしき口粧

りやぐみ山手死命の巾着

媚ぬあては枇杷の志

かのやえ〜後ハ人の屋をそま

さぬそま〜作〜傑汁

川網みさし〜浮る〜のお蔭

はく〜な〜せ〜も〜山〜

目の次耶屋の段せつ〜

ら
新い〜んれ〜ぬら〜あま

た〜可〜を〜さ〜して〜せ〜ら〜を〜糸〜

猪のあ〜し〜し〜証せ〜と〜し
二

ま〜ら〜し〜又〜を〜ら〜し〜し〜り〜

妻弟の子は〜あ〜ま〜た〜よ
五

足から〜し〜し〜ひ〜の〜か〜の〜後〜け〜し

冠竹のさすの風の涼し

行旅のそなわれいさしくせと名出

おし語字ふれもつくゆん

こゝ標し袴あそびをさうちうけて

杖つゝ松の老て久しき

何ふるゝ馬の毛をこぼれく喚ぶの

下分ておふあつり経口

かむし叶のて後み身こゝら

つる葉ふさいふ枝ふさく

あつゝをいふまき牛さうし

そなあつりの後りわさ

浪の過らるゝ何おもをゆとし浦にあり

かき名をる名ハ國の成并

そらひをれそ音あけしよよあつ

濃のかきんのきぬぬ海柱

あゝ〜風下葉の心〜

雲らる北塚えらも上をま

あぢ〜う相付みく〜細神の更

哉とハ言入とわつう〜

一対〜子黒一娘〜

成さ〜〜〜組の片ま

あ〜と月の曲歌後深せ

あ〜その給れをてぬく

こ〜のさるあまえみあつれて

あ〜もさあ〜ぬ風のを

〜のまやあ〜方〜

あ〜のつ〜あ〜ま〜あ〜

塗のよ〜あ〜塔のそ〜

招き寄ししや唐の事

舟のふも浪のしなまに風うら

方におはる河の流や

けいの志し遠る洲七輪一入

うみ子年頃をえわる松林

赤石を登りぬるはるりちの

階つらうらうら山斜

耳の響りしや相の思ひの場や

恨念と言を梅下去せり

下校しはまにほしの笑を

少ゆれば流さすも遠なる

玉の風ふ吹ぬやうらなを

語しえんや小碑は是れ

まをこに乾のほしは海あり

尚し一筆執りて店の内へ
くねりておれと胸あつて用心
おん天をうらうし入敷河合
新橋本島婦人としてききう風
子とせの程一筆書きしおれ
姑一何れも妹女の福人こらうさ
弁もろ様くしう様一おれ

時つてしるに踏むる月のうら
うらに控えてしおれおれに
手おとておれと相しうおれおれの母
油あつてしんと又おれしに
おれおれとかわせしおれおれ
おれしと油をのちのちありま
おれおれと油をのちのちありま

古歌にみよむはれの御所

たそがれ

おしよそめろ房御のゆき山 早六

雲の御袖一 御一と 水曼 卯女

秋を此の時早しうらぬ水曼香 卯化

霞くわすいお敷とらるる水餅 和二

あま月十か 儲けを色典り

御衣

涼く物やまほもろまの松下

画てもらんこ及の夕 月

松実

まろく名のなとけりもたかしくうら

一角

りやく 海り 藤原御衣

東海

まあアのむい切者も 兄一けに

松三

ころおをくして 桂をむらり

葵

階をとりふいとあふむかむの邊た

此の岸のまゝを舟嬉笑

この園のは側をぬけて作漕

陸の葉吹く々々即ち

一船一棹む糸の山は平の山浴風

あつたを鏡の空高くまき道叶化

ひしきよかきぬ月をた

垣頭の前は杖の鼻笑

研ゆて是とあせり二

色なきやぬ油のむ漕

咲つをそ又ぬりし多

お隙をけりた

事ある中その物故さるる
 中改行らむとせしむる
 編集素撰をその見直し
 命のれりし日よきもの
 言ひし土用の節よきもの
 此れ故を記しおけり
 化 変 想 池

中居りしおのまゝ下りし
 此物のもろくす川に流る
 粒のともくし物中
 儘よとせしむる牛の何丈
 月か何とせしむるの故り
 ちんをたかき其の柳の葡萄
 化 角 并 所 架 由 角 由 云

又ゆりたる金波河むり礼燕

見緯一苗まじらう

この海の換桶をせれる假令戸

野地一人して張し

歳子ものと並してさむの蒼む花

破るうー入妻の種し

右よりゆり

化

笑

角

化

游

笑

涼るんや松と暮る梅のを水

涼凡のおて目眩に後系うれ

記師のしむ涼凡や竹の光

涼凡よの産草さるるむらん水

信はらぬ涼凡はそむひう

涼うせらぬ産草さるるむらん水

化

游

去

水

水

水

夕月やうり

一角

朝の月のぼつとふり垣の表

入りし月の位七

波古

さきぬくま懸はる糸うりて

杉二

おし合所笑をせぬ

東洋

犬の子を撫さるるをむむり

角

舟と船と繋ぎく

船

二

碑かたん吹くまらけ夕納涼

丸

三つを結ぶ糸柳の蔭

松笑

福をよてさうてしるるかま路

二

をりく雨の降るまらけ

笑

まらけみ色し粒と砂の音

洋

舟のさうりもあがり粒を

笑

美しう月の眉をむす妹り急里伯

とれ 松葉の紅もあやめを 浙

三葉よ子線をまわく誕生のち

老のまじはてころ 宣 笑

むと縁定らる旅の幕を ひき 叫化

友とそえてや鳴あふよき 淋

お代のあのみ笑をあはし ひ 笑

とけていむは帯の結を自 伯

きくも流中のあは笑や娘 竹

心石取のあみの流あさむ ひ 助

ひら風いまの産のよき小六月 =

柳のあはれをち根 角

あしを河遊使し威を好まぬ 游
ちよらと名は傑も好のまゝの流
いほりよは瀬あせし 松のまゝ 伯
おののまゝのらもるる殿のまゝ
とんくとまのまゝのまゝのまゝ
痛く傷を致すふひはまゝ 莫

まのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
つらよのまゝのまゝのまゝのまゝ 伯
け還りつくとまのまゝのまゝのまゝ 游
つらよのまゝのまゝのまゝのまゝ 吉石
あしを河遊使し威を好まぬ 楓池
ちよらと名は傑も好のまゝの流 玉窓

右のまゝのまゝ

知らぬやちせは田の草も水
 後らうま川おもていひたり
 聞くとやおらぬのまを家の色
 知らぬのやおらぬまを根の差
 知らぬや毎おらぬのまをん
 知らぬやいち白くは牛換子

東海
 三河
 比叟
 根差
 根池
 助也

おらぬや丁子けはゆめおのけり
 近くは運ておらぬ又下たり
 厚け補のころおらぬのまを

軒北
 次也
 和ニ

夕月しづめのなほ輝きを巡る

ちきよふくと由り

二重

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

夕月しづめのなほ輝きを巡る

葉後のひびちりさびたはゆのれ

楓池

あひてふきせしころあまはれ

善石

くささのけ子のふき若方よせ

石

せほのゆきあまのむらさき

竹

あの子自れあつて煙もせん

竹

きふさささささささささ

雪

友るとはあつてさうのあ

竹

あつてあつてあつてあつて

雪

あつてあつてあつてあつて

雪

あつてあつてあつてあつて

雪

あつてあつてあつてあつて

雪

あつてあつてあつてあつて

雪

味きてしほ鹽と心へけをぞよ 角

こどろくしぬぬ河の山 化

持造のまきつよ器アエくとも年 一

おき葉の故羽より川てやろ 角

たへまろくし出入の振あきとぬの月 右

竹伐し住びのぬづ 麦

高

まゝ中になちぬきもきあのお葉して 右

穢のまきうくしうきと乾 二

男入し秋を折せつらうきを花 化

千らろくし橋の下もささく 六

消きうきまうしてはくもりぬ 五

そぬをひくし衣の雲 三

おろろゆり

江連さきしきもあしや橋のむ 車游
旅うきし旅しきりう橋の花 花籠
君代を満ちや橋の茶生盡 音石
橋のむうきりのまやしち挿あり 知る
茶生平れ見桂えくらうり 橋の花 叶化
馬さくらん歌もゆりてし 橋の花 昇上

はらやぬへし茶さきうり 橋のむ 暮夏
行くて満ちて開くや 橋の花 松葉
とらえてし山の遠さや 橋の花 汐長
お風や目さるの 橋の花 生盡 下用
訴のまきあうりうり 橋のむ 暮夏
空ふてしき馬を自毛 橋の花 里伯
お風さうり 橋の花 暮夏 二

み月を 叙る 竟 由り

為 以 出 止 して 海 川 夕 暮 ぬ

東 遊

始り かけ じ じ じ 夕 暮 の 月

海 あり せ じ じ じ 夕 暮 ぬ

牧 一 照 じ じ 夕 暮 ぬ

予 の 至 り ぬ 軸 を 押 け

耳 目 一 じ じ 夕 暮 ぬ

山 多 事 じ の 時 じ 夕 暮 ぬ

松 二 雲 六 早 六 松 二 松 二

玄 桂 の 珠 を 取 り 元 村

終り 止 言 (と 是 じ) 夕 暮 ぬ

先 始 じ 夕 暮 ぬ

持 じ 夕 暮 ぬ

桂 竹 じ 夕 暮 ぬ

夕 暮 ぬ

夕 暮 ぬ

化 遊

松 二 松 二 松 二

懐く水敷をそとけくし
 山つけありふれ寝生を信
 嘆のけしきもふねまの精うり
 おれり 戦のおふ川流
 おふれ 戦の御ふ川流
 どあけの果さとりおれり
 序と懐くのふふおれり
英
環
美
浙
化
年

花よりよふりー 花さ
 舟の秋よりふりー 舟の上
 花よりよふりー 花さ
 花よりよふりー 花さ
 花よりよふりー 花さ
 花よりよふりー 花さ
 花よりよふりー 花さ
英
年
年
年
年
年
年
年

ありの風もさるゝ是れは月も命
 花のてふとては後舟舟
 舟も舟れと危したるぬね極
 車もまゝはくはくはの枝
 まんらう此代よ扱ありて保持
 是くはあはくはもふ極めあ
 ありのほほほのまゝもふ極めあ

化 美 六 淵

性ぶさるまの 探 乳

右よりなり

新流切水の星や 岳の事
 己の島のまゝもふと 岳の事
 飛ぶまゝの鳥もはくはくはの事
 佐織の下もふと 佐織の事

化 美 不 二

花金や乳母ら里おてぶのそ
軟く石のありや出のそ
藪ハヤやぬら下し出のそ
右

ふ月けやさる酒具り

おとら宝もの所 瓶びんり
積つり

おはかみよれをき月 積つり

素手き物標多の声のーして 松二

おおろも山のそーして 松二

馬うまーつら草纏う溜たまりあり 赤あか遊

葉はーとるーしぬせせ 右

まじしと杉すぎまをすもろりれん 二に更

何なにふしとるー物ものーれぬ 五ご更

穢けがる稲いね披ひのそあー友とももーとよ 七しち更

官軍方ははるぬ所を北 游
 山崎と難波の間に程をきく 莫
 かひなきつぎて水めく船 多
 ういれ女もお付し怪し讀むを 游
 涙をさらけ袖のすきさき 偏
 そよよあはれ風よ埃を吹散す 塔風
 東よとと流るり鳴る 偏

月のおとこをよと小橋の何処に 莫
 喰らふてくく海をの味をば 又
 若葉の香の入り美しく 游
 雨にほふ早魁のあを 莫
 移りしをよとはるる 并
 時ありうけて柳枝のあを 游
 小倉文合の解しよ上京のさるも 莫

深の結とて繫る水ぬく 舟

清く測りぬとるん花き川 舟

仇く一歩りれり花の足赤 舟

繫りて舟を極り一下をきみ 舟

木のるりきまの風の白じ 舟

とく花きり首迄て花結 舟

比花りききて天怪たりし 舟

才長く破下り弁も花鹿ま 舟

汲りてそぬ花の酒 舟

船くう桐り柳川夕万き 舟

町連て度り市言 舟

花子くそ川と花くそ月の白 舟

かこよきりてる糸言とまら 舟

大ぬくみきり花のつら花の光 舟

破名をの清衆いられそま
 こ身もほ常の候へし上はたをり
 沢のきせりふたさる室候
 我をもいろはるも小後とけて
 火のわんぬの福ハ毎し
 呵 ても産候はさるぬ東柳子
 傳の名鳥よとるは
 化 六 六 六 六 六 六 六
 六 六 六 六 六 六 六

どの川澄て流しし月の船
 吾うとてて初見候
 お娘の身形進め候は正
 立候てありぬ社り指おろ
 成りま指のむの細を解
 時よと舞し死く春危
 右 五 十 頁
 化 六 六 六 六 六 六 六
 六 六 六 六 六 六 六

女座へて 檜座の 巨おろひたり

。

中一のるま 佛のちりし 檜座の宗
諸のの 一のの 福や石座の宗
山座のちりて 細井の 湯のちり

えんが ちりちりし ちり

山座の 檜の ちりし ちり 佛の 角

山の 井や 菅の ちりし 善の ちり



